

各校の通知表の様式や取組が、以前と少し変わってきている。

学期末は、様々な業務が集中し、長時間勤務を強いられることが多い。通知表の所見欄の記入についても、1・2学期末に保護者との個人懇談を実施するので、所見は書かないで、3学期は個人懇談を実施しないので所見を書くという学校もある。また、ある学校では、所見自体を書くか書かないか協議をし、今年度は書くことにした。更には、毎学期書くが文字数を半減したと言う学校もある。

筆者が子どもの頃(昭和30年代)、所見欄もあったが「懇談済み」というゴム印が押されていた。子どもながらに、担任と親はどんな話をしたか気になったものである。

「通知表の所見を書くのがつらいと感じますか？」との問いに、①いつも非常につらい81%、②つらい時もある15%、③つらくない4%（回答者1369人）というアンケート結果⁽¹⁾がある。つらく感じる教員は、96%（①と②の合計）にもなる。

以上のことから、所見記入は、教師にとってつらく、時間を要す業務であることが分かる。成績にかかわる業務は、日頃も期末においてもかなりの労力を要する。これは、今も昔も変わらない。学校生活で教員が指導をして、その経過や結果を保護者に伝えるのは、説明責任の観点からも大切であるし、当然であるし、指導に対する評価業務は教師の本業である。その伝える形が通知表であっても懇談・面談であっても良いと思うが、「忙しいから」「大変だから」を理由にして、所見の廃止や縮小には疑問を感じる。

通知表(通信簿)の作成の裁量権は、校長にあるので、作成しないという選択肢もある。また、内容や様式、呼び名は、各校によって任されている。

所見の廃止や縮小は、確かに記入に関わる時間が大幅に削減されるが、懸念されることも出てくる。まず、教員の子ども一人ひとりの成長や課題を長い目で見取ろうとする気持ちや力が減衰しないだろうか。また、子どもの様子を所見欄という限定されたスペース内に端的に記入するコメント力はどうなるだろうか。

所見欄へのコメントや見取りをカバーしてくれる優れたものが出現している。テストを自動的に採点するシステムやパソコンにテストの点数を入力したら、自動的に文例が出るソフトもある。もしかしたら、個人のデータをAIが分析判断し、その子のイメージを表記したPC画面をみながら、個人懇談が行われる日も近いかもしれない。データを入力すれば、AIが判断するので公平さが担保され、教師ガチャから解放されるかもしれない。しかし、パソコンソフトやAIに全て任せてもよいのだろうか。子どもたちを見取る力、そして、その子の成長や期待する姿を端的に表現するコメント力などの教師の大切な能力を手放してよいものだろうか。

所見の廃止や縮小は、働き方改革の事例集にも例示されているが、今急ぐのは子どもたちの未来のために、「大切に重要だ」「～望ましい」「～を最優先すべき」という大義名分で、教師に頭上に降り注ぐ業務を整理することではないだろうか。同内容の各種アンケートや議会答弁の調査等の依頼、電子化によって面倒になるなど、本業にかける時間を阻害する業務を削減することが、まず行う教師の働き方改革と思う。

そろそろ、勇気と覚悟をもって、どうでもいい仕事と決別してはどうだろうか。

(1) 引用 神奈川県教育委員会 神奈川県立総合教育センター 主幹兼指導主事 鈴木夏来(2020. 7. 10)
参照 毎日新聞ニュースクロス(2021. 8. 30) 毎日新聞社説(2022. 7. 25)
日本教育新聞(2021. 5. 24) 日本教育新聞管理職の独り言(2021. 10. 4)